

# ブルガリア語の「定性」の類型をめぐって

ヨフコバ四位 エレオノラ

富山大学人文学部紀要第70号抜刷

2019年2月

# ブルガリア語の「定性」<sup>1</sup>の類型をめぐって

ヨフコバ四位 エレオノラ

## 1. はじめに

スラヴ諸語の中で、定性を文法的に表す手段を有するのは、ブルガリア語とマケドニア語、だけ<sup>2</sup>である。これらの言語で用いられている定性のマーカである後置冠詞<sup>3</sup>はバルカン地域における言語接触の結果として発達した文法的手段であるとされる（Асенова 2002/1989, Lindstedt 2000, Aronson 2007）。

本稿では、ブルガリア語に着目し、定性というカテゴリーの形式的・意味的・機能的特徴について記述・分析し、分析をもとにブルガリア語における定性の類型について考察する。

## 2. 定性・不定性の形式的特徴

世界の言語には、定性および不定性の双方が標される場合（たとえば、英語）と、どちらか一方（一般的に、定性）のみが標される場合（たとえば、ルーマニア語）があると指摘される（Lyons 1999：48-49）。ブルガリア語は後者であり、定冠詞のみを有している。一方、不定性は無冠詞形（単語の語幹）によって表されるが、ブルガリア語には不定性を表す手段は他にもある。それは数字の「いち」（edin（男性）、edna（女性）、edno（中性）、edni（複数）<sup>4</sup>）を名詞の修飾語として付加するということである。しかし、edinの文法性をめぐっては議論がなされ、見解の一致は得られていない。

次は、定性と不定性の形式的特徴についてまず見ておく。

### 2. 1. 冠詞の体系

ブルガリア語の定性のマーカは定冠詞である。冠詞の接続は、形態論的な特徴（名詞の性）に従うと言われることが多いが、表1が示しているように、音声上の特徴（語幹のタイプ）がより決定的な要因となっている。また、男性名詞のみにおいては、冠詞の主格形（長形）と非主格形（短形）の区別がある（例1, 2）。しかし、この区別は標準文語のみにおいて行われ、口語や方言では厳密な使い分けのルールは存在しない。

表1 冠詞のパラダイム

	男性名詞	中性名詞	女性名詞	複数形
主格形 【長形】	(語幹が子音で終わる場合) -ăt/-jat	-to	-ta	-te/-ta
	(語幹が母音で終わる場合) -ta/-to			
非主格形 【短形】	(語幹が子音で終わる場合) -ă/-ja			
	(語幹が母音で終わる場合) -ta			

1) *Učebnikăt* e na masata.

教科書-冠詞 (主格) cop. に テーブル-冠詞  
教科書はテーブルの上です。

2) *Vzeh učebnikă.*

取った 1p.sg 教科書-冠詞 (非主格)  
私は教科書を取った。

3) *Knigata* e na masata. -冠詞

本-冠詞 (主格) cop. に テーブル  
本はテーブルの上です。

4) *Vzeh knigata.*

取った 1p.sg 本-冠詞 (非主格)  
私は本を取った。

上記の例から明らかになっているように、男性名詞である *učebnik* (教科書) の主格形と対格形は冠詞の形によって明確に区別されているが、女性名詞である *kniga* (本) では、そういった形式的な区別は存在しない<sup>5</sup>。冠詞による統語的役割の区別という問題に関しては3.で改めて取り上げ、詳しく論じる。

冠詞の性質、すなわち接辞であるということと、短形と長形の使い分けによって統語的役割が区別されるという特徴を前提に、ブルガリア語学では、定性というカテゴリーは文法的 (形態論的または統語論的) カテゴリーとして分類されることが多い。確かに、冠詞は形態論的手段ではあるが、その形態論的手段はカテゴリーの半分、すなわち定性のみに及んでおり、不定性が標されないため、カテゴリー全体を形態論的カテゴリーとして分類することには問題がある。また、冠詞による統語的役割の区別も、一部の名詞にしか及んでいないため、定性を統語

論的カテゴリーとして位置づけるのには問題があると思われる。

## 2. 2. 不定性の形式的特徴

不定性は、基本的に無冠詞形によって表されるが、*edin*が付加する形式も用いられている（例 5, 6）。不定性に関しては、主格形と非主格形の形式的な区別はない（表 2）。

表 2 不定性のパラダイム

	男性名詞	女性名詞	中性名詞	複数形
主格	無冠詞形			
非主格	<i>edin</i> + 無冠詞形	<i>edna</i> + 無冠詞形	<i>edno</i> + 無冠詞形	<i>edni</i> + 無冠詞形

5) *V našata katedra dojde prepodavatel po istorija.*

に 我々の-冠詞 学科 来た 3p.sg. 先生 の 歴史

我々の学科には歴史の先生がきた。

6) *V našata -冠詞 katedra dojde edin prepodavatel.*

に 我々の 学科 来た 3p.sg. 一 先生

我々の学科には一人の (=ある) 先生が来た。

4.2. で無冠詞形と *edin*が付加する形式の意味的・機能的特徴及び双形式の区別、そして *edin*の文法性について詳しく論じる。

## 3. 冠詞と統語的役割

ブルガリア語の冠詞について多く議論される問題の一つは、表 1にあるような、男性名詞の冠詞の長形と短形の使い分けである。ブルガリア語の規範文法書（Стоянов 1998/1964, Андрейчин 1978, Граматика на съвременния български книжовен език 1983）は使い分けのルールを文語に関しては徹底させている。しかし、口語や方言にはそういったルールは存在せず、冠詞の使用には様々なパターンがあり、言語使用者は自分の方言の特徴や言語使用場面の特徴（フォーマル vs インフォーマルなど）に従い、冠詞を使用している。また、近年インターネットやソーシャルメディアの普及によって広まった新しいタイプの文語（インターネットや SNS の文章）では、規範文法が定めている冠詞使用のルールからの逸脱の例が数多く見られる<sup>6</sup>。

冠詞の長形と短形は、ブルガリア語にかつて存在し、消失した格変化の役割を補うために形成された文法的手段<sup>7</sup>であるといわれるが、長形と短形の使い分けのルールが複雑であり、ま

た文語と口語では使い分けに大きな差があるため、このルールの廃止を求める学者は少なくない (Стойков 1950, Маслов 1956, Андрейчин 1958, Куцаров 2010, Пашов 2012)。2.1. で見たように、使い分けのルールは一部の名詞にしか及んでおらず、文法的ルールとしての完全な役割を果たしていない。では、冠詞が果たし得ない役割は如何なる手段によって補われているか、少しばかり見ておきたい。

ブルガリア語は自由な語順を持ち、語順の倒置が可能である。そのため主語が文頭にも文末にも生起することがあるが、文頭に来る名詞を主語として解釈するのは最も自然である。また、テーマ (主題) も基本的に文頭に来る<sup>8)</sup>。テーマが名詞の場合<sup>9)</sup>は、その名詞は定性的または指定的なければならないという制約がある。Иванчев (1968) は、文の文法的構造と文の実現的区分 (テーマ, レーマ) と定性という3つの要素が密接な関係を持ち、この3つの要素の結合はコミュニケーションのための重要な役割を果たしていると主張する。Иванчевの考察に従えば、例7) では、文頭に来る名詞が動作主 = 主語として解釈されるのは最も自然である。

7) *Momičeto udari momčeto.*

女の子-冠詞 殴った 男の子-冠詞

女の子が男の子を殴った。

もし7) のような例で語順に倒置があった場合、すなわち文末に来る名詞が動作主であり、文頭の名詞が動作の対象であった場合は、文頭の名詞が主語ではなく目的として解釈されるためには目的語の重複という統語的手段 (例8) が応用される。

8) *Momičeto go udari momčeto.*

女の子-冠詞 それ (= 女の子) を 殴った 男の子-冠詞

女の子は (= を) 男の子が殴った。

このように、冠詞は単独ではなく、語順または他の統語的手段との組み合わせによって、コミュニケーションに関わる情報を与える役割を果たしているのである。

#### 4. 意味的・機能的特徴

世界の言語における冠詞の意味記述または定性というカテゴリーの意味の定義には様々な概念 (Russell 1905, uniqueness (唯一性), Christophersen 1939, familiarity (親近性), Strawson 1950, identifiability (同定), Krámský 1972, determination (特定化), Hawkins 1978, shared knowledge (共通知識), Lyons 1999, reference/specification (指示/指定)) が用いられている。

また、単一概念による記述が困難な場合は、複数の概念による記述が行われることもある。冠詞及び定性の意味記述の歴史に関してはLyons (1999) に詳細な記述があるため、本稿ではこの問題には触れない。本稿では、ブルガリア語の定的形式および不定的形式の用法に着目して、両タイプの形式を分析し、分析をもとに、(不) 定性というカテゴリーの意味記述にもっとも有効な概念について探ってみる。長形と短形の区別の議論を避けるためには、主格に焦点を当てる。

#### 4.1. 冠詞の意味・機能

ブルガリア語の冠詞の機能は伝統的に3つに分類される (Андрейчин 1958, Стоянов 1968, Лакова 1983)。その機能とは、個別的定性 (例9)、数量的定性 (例10)、総称的定性 (例11) である。

9) *Studentăt* pozdravi prepodavatelja.

学生-冠詞 挨拶した3p.sg. 先生-冠詞

学生は先生に挨拶した。

10) *Studentite* ot *treți* *kurs* šte hodjat na spetzializatzija.

学生-冠詞 から 三番目 学年 fut. 行く3p.pl. に 研修

三年生の学生が研究に行く。

11) *Pingvinăt* e ptitza.

ペンギン-冠詞 cop. 鳥

ペンギンは鳥だ。

ブルガリア語の文法書で指摘される冠詞のこれらの機能は、冠詞の使い方の分類上は重要であるが、意味 (意味特徴) の記述ではない。では、冠詞の意味をどのように記述し、定義できるのだろうか。以下の例を用いて、冠詞の意味について考慮する。

12) *Beše izbran* nov *president*. *Prezidentăt* šte vstăpi v *dlăžnost*

選ばれた 新 大統領 大統領-冠詞 fut. 就く3p.sg. に 任務

*drugija* mesetz.

次 月

新しい大統領が選ばれた。大統領は来月就任する。

- 13) Zemetreseniето otne života na hiljadi duši. *Prezidentät*  
地震-冠詞 奪った3p.sg. 命-冠詞 の 大勢 人 大統領-冠詞  
objavi izvânredno položenie.  
宣言した3p.sg. 非常 事態  
地震は大勢の人の命を奪った。大統領は非常事態を宣言した。

- 14) Q: Koi sudenti šte hodjat na spetzializatzija?  
どの 学生 fut. 行く3p.pl. に 研究  
どの学生が研修に行きますか。

A: *Studentite ot treti kurs* (šte hodjat na spetzializatzija).  
学生-冠詞 から 三番目 学年 fut. 行く3p.pl. に 研修  
三年目の学生が研修に行きます。

- 15) Rumen Radev e *novijat prezident*<sup>10</sup> na Bălgarija.  
ルメン ラデフ cop. 新-冠詞 大統領 の ブルガリア  
ルメン・ラデフがブルガリアの新大統領だ。

12) における冠詞形の名詞の用法は照応である。Hawkins (1978) は冠詞による照応的用法の基本的な意味は「共通知識 (shared knowledge)」であると主張する。12) における冠詞形の用法は、確かに共通知識を表しているが、この場合の共通知識は、発話参加者(話し手、聞き手)が本来共有している情報に基づく共通知識ではなく、文脈があつての共通知識である。そのため、本稿では、12) にあるような冠詞の用法の意味を、Strawson (1950) や Kempson (1975) に従い、「特定可能」(identifiability) または「唯一的に特定可能」(uniquely identifiable) と記述したい。

13) における冠詞形の用法も照応的用法として分類できるが、この例における照応は、12) と異なり、先行文脈によるものではなく、Hawkins (1978) がいう associative anaphoric uses (連想的照応)、つまり「地震が起きた国⇒その国に大統領がいる⇒その大統領」とう連鎖に基づくものである。その場合の指示物の指定・特定は、文脈ではなく、状況・場面によってなされている。

14) は典型的な指定文である。問いは、複数ある候補の中からどれか一つの選定を求め、回答は、その選定された候補を提示している。この使い方は、日本語の倒置指定文(西山2003)または総記といわれる(久野1973)文における助詞「が」の用法に極めて近い。

12), 13) における冠詞形の名詞が主題(テーマ、トピック)であるのに対し、14) の名詞

は焦点（レーマ，コメント）である。文の情報構造において異なる役割を果たしている成分が同じ文法的マーカーによって標されることには一見矛盾があるように思われるが，文法的標識の共通性は意味的特徴の共通性に基づくものであると考えられる。その共通性とは，どの文においても，冠詞形の使用によって指示物の指定・特定が行われているということである<sup>11</sup>。

15) はいわゆるコピュラ文である。ブルガリア語には有冠詞形のコピュラ文と無冠詞形のコピュラ文がある。後者に関しては4.2.で考察するので，ここでは有冠詞形のコピュラ文のみに着目する。15) では，1項述語を満たす値を探し，それを主格名詞によって指示する。言い換えれば，述語に示された名詞に該当する対象を変項から探し，その対象として主格の名詞を取り上げる。そのような特徴を持つコピュラ文を指定文または同定文と呼ぶ<sup>12</sup>。ブルガリア語では，15) の語順の倒置は16) のように可能であるが，15) の方が自然な文である。

16) *Prezidentăt (Novijat prezident) na Bălgarija e Rumen Radev.*

14) と15)は情報構造（レーマ・テーマ／焦点・主題）に関しては同じ構造を持っているが，述語のタイプが異なり，14) は動詞述語であり，15) は名詞述語である。

12) ~ 15) のどの文においても，冠詞が指示物を指定・特定するために用いられているので，これらの用法における冠詞の意味を包括し「特定」と定義づけたい。

ここまで見てきた冠詞の用法は，ブルガリア語学の伝統的分類である個別の定性および数量的定性に当たる用法である。次に，いわゆる総称的定性について見てみたい。

総称的名詞の定性・不定性をめぐっては多くの議論がなされる。また，総称的名詞と非総称的名詞の定性の関連付けをめぐっては見解が分かれ，共通性を求める立場（Topolińska 1974, Seppänen 1984, Lyons 1999）と，共通性を否定し，別々のカテゴリーとして扱う立場（Burton-Roberts 1976, Givon 1978, Mayer 1988）がある。この議論は，分析対象となっている言語の特徴にもよるものであるので，ここではブルガリア語を例に考察を行う。

ブルガリア語では，総称的な名詞は，定的な場合（11）と，不定的な場合（17, 18）がある。

17) *Edin džentălmen trjabva da se dărži prilično.*  
 一 紳士 べき ように 振る舞う 礼儀正しく  
 紳士は礼儀正しく振る舞うべきだ。

18) *Гладна мечка хоро не играе.*<sup>13</sup>  
 お腹がすいた 熊 ダンス 踊らない3p.sg.  
 お腹がすいた熊はダンスを踊らない。(=誰もがあただでやってくれない)



総称的名詞の定的用法と不定的用法には違いがあると思われるが、その違いについては不定性を論じる4.2.で取り上げる。ここでは、冠詞を伴っている総称的名詞の用法に焦点を当て、総称的名詞における冠詞の用法を根拠づける意味的要因および非総称的名詞との関連性について考察する。

Lyons (1999:233) は、総称的名詞が特定可能であり、また既知の情報を表しているため、冠詞を伴っていると主張し、その主張の根拠としては日本語の助詞「は」の総称的な働きを挙げている。Lyonsの主張を例示するのはブルガリア語の例19)である。

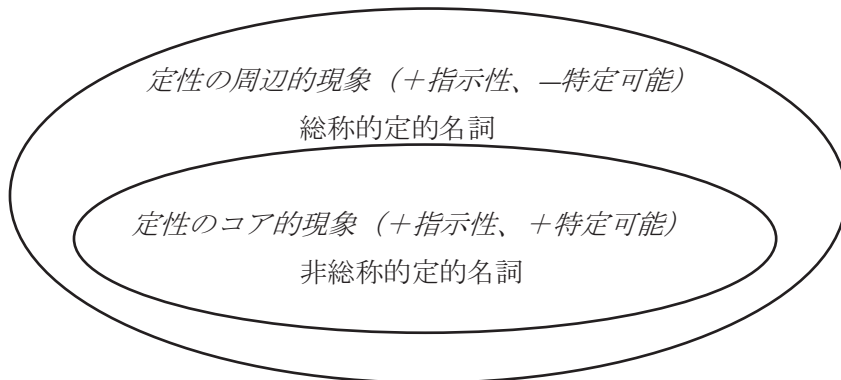
19) *Zemjata* se văr̄ti.

地球-冠詞 回る

地球は回る。

19) のような総称的名詞は、確かに特定可能であり、また既知の情報を表しているのであるが、このタイプの総称的名詞は稀少であり、多くの総称的な用法では、11) のように、名詞がその種を代表し表している。そのため、ブルガリア語の定的総称的名詞の意味が *тоталност* (「全体性」, どの〜も) という概念で記述されることが多い (Станков 1987, Ницолова 2008)。

総称的定的名詞は、その唯一性 (例19) または種の代表者として (例11) 指示するという働きにおいては非総称的定的名詞の指示性と共通点を持っているといえる。しかし、総称的定的名詞の指示的働きには指示対象の特定化が前提にないので、その点においては非総称的定的名詞と異なる。そのため、本稿では、以下の図のように、非総称的名詞の冠詞の働きを定性のコアの領域に位置づけ、総称的名詞の冠詞の働きを定性の周辺の領域に位置づけたい。



## 4.2. 不定的形式の意味と機能

2.2. で見てきたように、ブルガリア語では不定性は無冠詞形かedinが付加する形式によって表される。ここでは、この二つの形式の意味・機能上の相違について少しばかり考察する。さらに、edinの文法化についても考察する。

考察は、無冠詞の形式から始めたい。

無冠詞の形式には二つの異なった働きがある。一つ目は、20), 21) のようなコピュラ文における措定的用法である。措定文の無冠詞形の名詞には指示的な働きはなく、主格名詞の属性や性質を叙述するという働きのみがある。一方、22) のような動詞述語文においては無冠詞形の名詞 (= 主格名詞) には指示的な働きがある。

20) Rumen Radev e *president*.

ルメン ラデフ cop. 大統領

ルメン・ラデフは大統領だ。

21) Ivan e *prepodavatel po istorija*.

イヴァン cop. 先生 の 歴史

イヴァンは歴史学の先生だ。

22) V našata katedra dojde *prepodavatel po istorija*.

に 我らの-冠詞 学科 来た 3p.sg. 先生 の 歴史

我らの学科には歴史の先生が来た。

22) は23)のように、edinを伴うことも可能である。

23) V našata katedra dojde *edin prepodavatel po istorija*.

すでに見てきたように、指定的コピュラ文もある(例15)。指定的コピュラ文と措定的コピュラ文は、述語名詞の性質(+指示的, -指示的)のみならず、語順の倒置という点においても異なる。指定的コピュラ文は可逆的(reversible)である(例16)が、措定的コピュラ文では述語と主語の位置を入れ替える(*Prezident e Rumen Radev*)と、措定文ではなくなり、指定文になる<sup>14</sup>。

定的名詞と不定的名詞の違いは、指示対象が特定可能であるか否かによるものであると主張される(ニコラエヴァ 1979, Fodor and Sag 1982, Declerck 1986, Mayer 1988)。しかし、ブルガリ

ア語には、2つの不定的形式があるので、この主張をその両方の形式について検証する必要がある。指示対象の特定の可能性との関連においては、ブルガリア語の冠詞形と edin が付加する形式と無冠詞形の3形の違いについては次のように指摘されている（Шамрай 1989, Ницолова 2008）。冠詞形の指示対象が話し手にとっても聞き手にとっても特定可能である（例24）のに対し、 edin が付加する形式の指示対象は話し手のみにとっては特定可能である（例25）。一方、無冠詞形は特定の指示対象を有しない（例26）。

24) Sled malko šte dojde lekarjat.  
 あと しばらく fut. 来る 3p.sg. 医者-冠詞  
 医者は、もう少ししたら、来る。

25) Sled malko šte dojde edin lekar.  
 あと しばらく fut. 来る 3p.sg. 一 医者  
 もう少ししたら、一人の医者が来る。

26) Sled malko šte dojde lekar.  
 あと しばらく fut. 来る 3p.sg. 医者  
 もう少ししたら、医者が来る。

Ницолова (2008: 93) は、24) と 25) のような用法を特定指示 (specific reference) と呼び、26) を不特定指示 (non-specific reference) と呼ぶ。Abbott (2004) は、specific/non-specific の区別を 'whether or not the speaker has a particular individual in mind' と定義づけている。では、specific/non-specific の区別との関連においては、 edin が付加する形式と無冠詞形がどう違うか、もう少し考慮してみたい。考察は、 edin の文法化をめぐる議論にも及ぶ。

ブルガリアの多くの研究者は един を不定性のマーカーとして認めない（Андрейчин, Попов, Иванов 1953, Стоянов 1998/1964, Зидарова 2002,）。その根拠として、 edin が数字としての本来の意味と機能を保持していることと、 edin の有無が意味の区別に貢献していないということが主張される。一方、 edin を不定性のマーカーとして認める立場もあるが、その中で、 edin は文法化し、不定性のマーカーとしての機能を担ってきたと主張する立場（Иванчев 1957, Friedman 1976, Станков 1984）と edin の使用は任意的であり、無冠詞形との置き換えは自由であると主張する立場（Маслов 1956, Лакова 1983, Гинина 1998）がある。これらの議論は主格名詞、非主格名詞の双方に及んでいるが、本稿では、主格名詞に絞り考察を進めていく。Edin の文法性を論じる上、 edin が付加する形式と無冠詞の形式の置き換えにはどのようなパターン

があるか、明確にする必要がある。

まずは、27) と 28) を見られたい。

27) Ivan e pevetz.

イヴァン cop. 歌手

28) Ivan e edin pevetz.

イヴァン cop. 一 歌手

27) は指定文であり、主格名詞(イヴァン)の単なる性質を表している(「イヴァンは歌手だ」)。一方、28) も指定文ではあるが、意味は27) と異なり、29) にあるような軽蔑的なニュアンス(皮肉)を表す婉曲的な文である。

29) Ivan e edin pevetz, njama što.

イヴァンはたいした歌手じゃない。

従って、これらの文は異なる意味を表しており、置き換えは不可である。

次に、30), 31), 32) を見られたい。

30) Džentälmenät ne biva da se dărži taka.

紳士-冠詞 ない べき よう 振る舞う 3p.sg. このように

31) Edin džentälmen ne biva da se dărži taka.<sup>15</sup>

一 紳士 ない べき よう 振る舞う 3p.sg. このように

32) \*Džentälmen ne biva da se dărži taka.

紳士 ない べき よう 振る舞う 3p.sg. このように

30) ~ 32) は総称的意味(「紳士はこのように振る舞うべからず」)を表す文であり、30) は冠詞形の文、31) は edin が付加する文、32) は無冠詞形の文である。4.1. では、総称的意味を持つ文において、冠詞形、edin が付加する形式、無冠詞形の3つの形式の使用は可能であると述べたが、上記の例から明らかとなっているように、上記の文脈なら無冠詞形を使うと非文になる。従って、これらの文では、edin が付加する形式と無冠詞形の置き換えは不可である。

次に、33) と 34) を比較されたい。

33) *Dete igræ na dvora.*

子ども 遊ぶ3p.sg. で 庭

34) *Edno dete igræ na dvora.*

一 子ども 遊ぶ3p.sg. で 庭

33)も34)も「子どもが庭で遊んでいる」ということを表しているが、34)の*edno dete*は指示物を指定しているが、34)にはそういった意味はない。これらの文の違いは、その前提となる疑問文から明確である。33)の前提となる疑問文が「庭でどのようなことが起きているか」ということであるのに対し、34)の前提となる疑問文は「誰が庭で遊んでいるか」ということである。

ここまで見てきた文に関しては、*edin*が付加する形式と無冠詞形の置き換えは不可である。次に、*edin*が付加する形式と無冠詞の形式の置き換えが可能となる場合はあるか、考察してみたい。Ницолова (2008) は、*edin*の任意的な用法として次の例を挙げている。

35) *Šte hodim na (edno) zasedanie za učebnite planove*<sup>16</sup>.

fut. 行く1p.pl. に 一 会議 ため 教育-冠詞 方針  
教育方針を決める会議に行く。

36) *Otväd ezeroto se izdigaše (edin) zamāk s ostrovārĥ pokriv*

向こうに 湖-冠詞 そびえ立っていた 一 城 と 尖った 屋根

*i visoki svodesti verandi.*

と 高いpl. 丸いpl. ベランダpl.

湖の向こうには、尖った屋根と高く丸いベランダの城がそびえ立っていた。

35), 36) の日本語訳からも明らかになっているように、これらの例における*edin*が付加する名詞は主題ではない。本稿での考察は不十分で有り、徹底的調査がさらに必要であると思われるが、*edin*が付加する形式と無冠詞の形式の置き換えが可能なのは、その名詞が主題以外の場合であると言えよう。また、主題化に伴い、指示対象の特定がなされ、無冠詞形の使用は不可となる。この主張は、Станков, Иванова (1989) が挙げている次の例によって根拠付けられる。

37) V stajata vleze (edno) dete.

に 部屋-冠詞 入った3p.sg. (一) 子ども  
部屋に子どもが入った。

38) V stajata vleze edno dete, koeto bjah izpratil za vestnitzi..

に 部屋-冠詞 入った3p.sg. 一 子ども 関係代名詞 行かせた1p.sg. に 新聞  
新聞 (を買い) に行かせた子どもは部屋に入った。

39)\* V stajata vleze dete, koeto bjah izpratil za vestnitzi..

に 部屋-冠詞 入った3p.sg. 子ども 関係代名詞 行かせた1p.sg. に 新聞

37)における *dete* はレーマとして働くため、*edin* が付加する形式も無冠詞の形式も使用でき、また置き換えが可能であるが、関係節の付加によって指示対象の特定(主題化)がなされるため、無冠詞形の文(39)は非文となる。

ここまで見てきた *edin* の意味的・機能的特徴をもとに、*edin* は不定性のマーカーとしての機能は取得しつつあるが、完全には文法化していないと言える。Givon (1978) は不定冠詞の文法化に関しては3つのステージ、すなわち、1.numeral>2.indefinite determiner>3.indefinite article を区別し、ステージ2からステージ3への変化を指示性の *bleaching* として指摘する。また、Geist (2013) のブルガリア語の *edin* に関する指摘では、*edin* はまだ不定冠詞にはなっていないと主張し、その主張のため、Heine (1997) が設定している不定冠詞の文法化の5つのステージの図式(1.the numeral>2.the presentative marker>3.the specificity marker>4.the non-specific marker>5.the generalized article)を用い、3と4の間にさらなるステージを設け、そこにブルガリア語の *един* を位置づけている。

## 5. まとめ

以上の考察から、ブルガリア語の(不)定性というカテゴリーの特徴および類型について次のようにまとめる。

ブルガリア語では、定性と不定性は同一カテゴリーの両側面であるが、定性のみが標される。また、定冠詞の長形の短形の区別によって統語的役割の区別はなされるが、その区別は一部の形式にしか及んでいないため、絶対的な統語的特徴ではない。

ブルガリア語の定性と不定性は、冠詞形、*edin* が付加する形式、無冠詞形の三つの形式によって表されるが、*edin* が文法化の途中であり、完全な不定冠詞にはなっていない。

また、冠詞形、*edin* が付加する形式、無冠詞形の三つの形式の意味特徴及び機能は以下の通

りである。以下のように分類された意味特徴をもとに、ブルガリア語の定性というカテゴリーの意味の記述に最も有効である特徴として「特定可能」という特徴を提案したい。

表3 定性・不定性の形式の意味的特徴および機能

	冠詞形	edin+ 無冠詞形	無冠詞形
± 定性 (definiteness)	+ 定性	- 定性	- 定性
主題／焦点 (theme/rheme)	主題・焦点	主題 <sup>17</sup> ・焦点	焦点
± 総称的 (generic)	- 総称的・ + 総称的	- 総称的・ + 総称的	- 総称的・ + 総称的
± 指示的 (referential)	+ 指示的	+ 指示的・ - 指示的(批判的措定文)	- 指示的(措定コピュラ文)・ + 指示的
± 特定可能 (identifiability)	+ 特定可能	+ 特定可能	- 特定可能
話し手・聞き手	話し手・聞き手	話し手のみ	

## 引用文献

- Abbott, Barbara. 2004. Definiteness and indefiniteness. Laurence R. Horn and Gregory Ward (eds.) *The Handbook of Pragmatics*. Oxford, Blackwell, pp. 122-150.
- Aronson, Howard. 2007. *The Balkan Linguistic League. "Orientalism" and Linguistic Typology*. Beech Stave Press, Ann Arbor.
- Burton-Roberts, Noel. 1976. On the generic indefinite article. *Language* vol.52-2, pp.427-448.
- Christophersen, Paul. 1939. *The Articles. A Study of Their Theory and Use in English*. Copenhagen, Munksgaard.
- Chafe, Wallace. 1976. Givness, contrastiveness, definiteness, subject, topics, and point of view. Charles N. Li (ed.) *Subject and Topic*. New York, Academic Press, pp.25-55.
- Clark, Herbert and Catherine R. Marshall. 1981. Definite reference and mutual knowledge. Aravind K. Joshi, Bonnie L. Webber, Ivan A. Sag (eds.) *Elements of Discourse Understanding*. Cambridge, Cambridge University Press, p.10-63.
- Declerck, Renaat. 1986. Two notes on the theory of definiteness. *Journal of Linguistics* 22. pp. 25 – 39.
- Fodor, Janet and Ivan A. Sag. 1982. Referential and quantificational indefinites. *Linguistics and Philosophy* 5, pp 355-398.
- Friedman, Victor. 1976. The questions of a Bulgarian indefinite article. *Bulgaria Past&Present*. Ohio, Columbus, pp. 334-339.
- Geist, Ljudmila. 2013. Bulgarian *edin*: the rise of an indefinite article. U. Junghanns, D.Fehmann, D. Lenertová and H. Pitsch( eds.) *Formal Description of Slavic Languages: The Ninth Conference* , pp.125-148.
- Givon, Talmi. 1978. On the development of the numeral 'one' as an indefinite marker," *Folia Linguistica Historica* II .1, pp.35-53.
- Halliday, Michael. 1967. Notes on transitivity and theme in English. *Journal of Linguistics* 3, pp.199-

- 244.
- Hawkins, John. 1978. *Definiteness and Indefiniteness: A Study in Reference and Grammaticality Prediction*. London, Croom Helm.
- Heine, Bernd. 1997. *Cognitive Foundations of Grammar*. New York – Oxford, Oxford University Press.
- Kempson, Ruth. 1975. *Presupposition and the Delimitation of Semantics*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Krámský, Jiří. 1972. *The Article and the Concept of Definiteness in Languages*. The Hague, Mouton.
- Lambrecht, Knud. 1994. *Information Structure and Sentence Form*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Leafgren, John. 2002. *Degrees of Explicitness*. Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins.
- Lindstedt, Youko. 2000. Linguistic balkanization: contact-induced change by mutual reinforcement. Dickey Gilberts, John Nerbonne, Joe Schaecken (eds.) *Language in Contact*. Amsterdam-Atlanta, Rodopi, pp.231-246.
- Lyons, John. 1977. *Semantics 1*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Lyons, Christopher. 1999. *Definiteness*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Mayer, Gerald. 1988. *The Definite Article in Contemporary Bulgarian*. Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- Russel, Bertrand. 1905. On denoting. *Mind* 14, pp.479-493.
- Scholze, Lenka. 2008. *Das Grammatische System der Obersorbischen Umgangssprache im Sprachkontakt : mit Grammatiktafeln im Anhang*. Domowina-Verlag.
- Seppänen, Aimo. 1984. The generic indefinite article in English: A re-examination. *Studia Linguistica* 38 (2), pp. 99-117.
- Strawson, Peter F. 1950. On referring. *Mind* 59, pp.320-344.
- Topolińska, Zuzanna. 1974. The range of the so-called definite article in the Balkan languages. *Makedonski jazik* 25, pp.123-130.
- Андрейчин, Любомир. 1958. Из въпросите и практиката на членуването в българския книжовен език. *Български език*, кн. 1, pp. 3-10.
- Андрейчин, Любомир. 1978. *Основна Българска Граматика*. София, Наука и изкуство.
- Андрейчин, Любомир, Константин Попов, Минко Иванов. 1953. *Съвременен български език. Учебник за първи курс на учителските институти*. София, Народна Просвета.
- Асенова, Петя. 2002/1989. *Балканско езикознание. Основни проблеми на балканския езиков съюз*. Велико Търново: Фабер.
- Гинина, Стефана. 1998. Изразяване на категорията неопределеност на имената в съвременния български език. *Помагало по българска морфология. Имена*. Под ред. А. Алескандров, Р. Русинова. Ш. pp.195-203.
- Граматика на съвременния български книжовен език. В три тома. Том II. Морфология. 1983. БАН
- Зидарова, Ваня. 2002. *Български език. Теоритичен курс с практикум*. Пловдив.
- Иванчев, Светломир. 1957. Наблюдения върху употребата на члена в българския език. *Български език*. Кн. 6. С. 1957. pp. 499-525.
- Иванчев, Светломир. 1968. Проблеми на актуалното членение на изречението. *Славянска филология* 10, pp.39–53.
- Куцаров, Константин. 2010. *Следходността в българския език*. Пловдив, Университетско издателство “Паисий Хилендарски”.



- Лакова, Мария. 1983. Семантика на въпросителните местоименни думи в съвременния български книжовен език във връзка с категорията определеност/неопределеност // *Изследвания върху съвременния български книжовен език и неговата история*. София, БАН, pp.147-178.
- Маслов, Юрий. 1956. *Очерк Болгарской Граматики*. Москва, Издания Литературу на Иностранних Языках.
- Мирчев, Кирил. 1978. *Историческа граматика на българския език*. София: Наука и изкуство.
- Николаева, Татяна. 1979. Категория определенности – неопределенности в славянских и балканских языках. Москва, Наука.
- Ницолова, Руселина. 2008. *Българска Граматика. Морфология*. София, Университетско издателство Св. Климент Охридски.
- Пашов, Петър. 2012. По въпроса за пълния и краткия член в българския език. <https://unustamatubg.wordpress.com/2012/10/07>.
- Станков, Валентин. 1984. За категорията *неопределеност* на имената в българския език. *Български език*. Кн. 3. pp. 195-205.
- Станков, Валентин. 1987. За семантичния инвариант на определителния член в българския език. *Български език* 1-2, pp. 84-94.
- Станков, Валентин, Мая Иванова. 1989. За неопределените именни синтагми, изразяващи специфичност / неспецифичност. *Български език*. Кн.1, pp. 14-27.
- Стойков, Стойко. 1950. Членуването на имената от мъжки род, единствено число в българския език. *ГСУ. Историко-филологически факултет*, 46(4), pp. 3-46.
- Стоянов, Стоян. 1968. Граматическата категория “определеност” в българския език и нейните съответствия в други славянски езици. *Славянска филология* 10, pp. 69-81.
- Стоянов, Стоян. 1998/1964. *Граматика на българския книжовен език*. София, Наука и Изкуство.
- Шамрай, Татяна. 1989. *Членувани и нечленувани имена в българския език*. София, Народна Просвета.

久野暉 1973 『日本文法研究』 大修館書店.

西山佑司 2003 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句』 ひつじ書房.

## 注

- 1) 本稿では、定性・不定性の双方を扱うが、双方を包括し「定性」という用語で称する。なお、定性と不定性は、同一カテゴリーの側面として考慮される場合と独立した別々のカテゴリーとして考慮される場合があるが、本稿は前者の立場に立つ。
- 2) 口語ではソルブ語でも冠詞が文法化しており (Scholze 2008), また, ロシア語北部の方言でも指示代名詞の後置的な使用がある (Мирчев 1978) が, 口語・文語両方において定性を表し得るのはブルガリア語とマケドニア語だけである。
- 3) 以下, 冠詞のみと称する。
- 4) 以下, 4 形を包括し, 性・数と関係なく edin として言及する。
- 5) 中性名詞と複数形も, 同様に区別は存在しない。
- 6) たとえば, 次のように, 主格には非主格形 (1), 二重下線), または非主格には主格形 (2), 点線) が用いられる。
  - 1) Protesta šte se sāstoi utre v 18:30 časa. (Facebook) デモは明日 18 : 30 に行われる。
  - 2) Sled kato rokāt beše izgonen ot Kavarna, sega kmetitzata si e postavila za tzel da zaliči i spomenāt

za nego. (Facebook) 市長は、カヴァルナからロックを追放してから、今度はその思い出も取り消すことを目指している。

- 7) 人工的に作られたルールである。
- 8) テーマが文頭に来るということは言語普遍的な特徴であり、ブルガリア語に限らず、様々な言語に関して指摘されている。(Halliday 1967, 'topichood and lefthand position', Lyons 1977, 'initial position and thematic subject', Leafgren 2002, 'association between topicality and early linear position'.)
- 9) 主語部も述語部もテーマになり得る (cf. Иванчев 1968)。
- 10) 名詞に修飾語 (形容詞や代名詞) がある場合は、冠詞は修飾語に付く。
- 11) Lambrecht (1994) はこのような文を 'identificational sentences' と称する。Chafe (1976) は、それを 'activation of the information (knowledge) at the moment of utterance' と呼んでいる。また、Clark & Marshall (1981) は 'direct definite reference convention' という用語を用い、指示物の特定化のプロセスを次のように説明付けている: 'the speaker has good reason to believe that on this occasion the listener can easily infer (略) mutual knowledge of the identity of that set'。
- 12) 指定文と同定文は全く同じではないが、その違いは本稿の考察には影響しないため、ここでは区別しない。
- 13) 無冠詞形は、例 18) のように、ことわざや慣用句に多い。
- 14) 次のような疑問文を前提にもつ無冠詞形の文は指定文である。また、語順の倒置は可能である。

Q: Koj e *president*?

だれが大統領ですか。

A: Rumen Radev e *president*. / *Prezident* e Rumen Radev.

ルメン・ラデフが大統領です。

一方、措定文の前提は以下の例のようである。その場合は、叙述文 (Rumen Radev e *president*.) の語順の倒置は不可である。

Q: Kakäv e Rumen Radev? / Rumen Radev kakäv e?

ルメン・ラデフは何者ですか (何をする人ですか)。

A: Rumen Radev e *president*. / \**Prezident* e Rumen Radev.

ルメン・ラデフは大統領です。

- 15) 30) より 31) の方が一般的であり、自然な用法である。総称名詞に関しては、冠詞形, edin が付加する形式のどちらでも使用できると指摘してきたが, 31) のように, edin が付加する形式の方が自然な用法の場合がある。それは, Ницолова (2008: 111) の次の指摘をもとに説明できよう。Ницолова は、総称的な使用で、カテゴリー全体だけでなく、特定の指示物としての解釈も与えたい (つまり、話者が名詞を総称的に使用しているにもかかわらず、特定の人物を念頭に置いている) 場合は、冠詞形の使用は不適切であると主張し、その主張の根拠として次の例を挙げている。

\**Măžăt mnogo običa da hodi na mač, no Ivan ne e stăpval na mač.*

男はサッカーに行くのが大好きだが、イヴァンは一度も行ったことがない。

上記の文は非文であるが, edin が付加する形式の文に置き換えると、文法的文になる。

*Edin măž mnogo običa da hodi na mač, no Ivan ne e stăpval na mač.*

- 16) この例における edin が付加する形式は主語ではなく目的語であり、本稿の考察の対象から外れているが, Ницолова が挙げている根拠のためにここで取り上げる。
- 17) 主題の場合は、文頭に移動する。

